

仏像修理雑感

渡 邊 真 吾

文化財の修理を専攻していた学生時代、大学の实地研修としてある仏像の搬入作業に参加したときのことである。対象となる仏像は、平安時代の造像とされる像高約二八〇cmの、いわゆる「丈六」の巨大な如来坐像。約二年半に渡る修理期間を終えて、元のお堂にお戻りになるとのことだった。残暑の残る初秋、よく晴れた空の下白布などで梱包した像を数人がかりで運んだ。安置されるお堂は地域で管理している小さなお堂で、その日は仏さまの凱旋とあって多くの地域住民の方が駆けつけてくれていた。皆さんの見守る中、像を堂内に運び込み、奥に安置し、白い布を解く。像がその姿をあらわし、無事に安座と相成った。気の遠くなるような長い修理期間のうち、わずかに搬入作業を手伝ったに過ぎない自分ではあったが、生意気にも一人前の充実感を感じたものである。

ふと、後ろを振り返った。するとそこには、堂内狭しと集まった地域の皆さんが一斉にこちらを向き、両手を合わせて拝んでいる光景があった。無論、自分の背後の仏さまに向けてのものである。すぐに脇によけ、長い旅から戻った本尊に向けて低頭し合掌する彼らをしばし無言で眺めた。扉から差し込む陽光が堂内を淡く照らし出して、息を呑む音さえためられるような瞬間だった。

その後、大学を卒業し、山形で仏像修理の仕事に携わるようになって間もない頃、観音菩薩像の修理依頼を受けた。像高一〇〇cm強の、一木造の立像である。所蔵する寺は車の入ってゆけない山の頂付近にあったため、麓で車を降りてそこから山頂まで延々と続く石段を登っていかねばならない。そ

こで運搬に当たっては、像の寸法に合わせた木製の担架をつくり、長い道程を凌ぐこととした。時期は晩秋の頃だったが、まさに小春日和といった暖かい日で、汗水を垂らしながら石段を登った。新たな仕事が始まるという高揚感と不安感が入り混じって半ば興奮した心もちであったせいか、後先のペースも考えず足早となり、途中の山門付近で息も絶え絶えとなる始末であった。寺に着くと挨拶もそこそこに魂抜きの法要が執り行われ、観音様の梱包作業となった。本体、台座、光背を須弥壇から降ろし、それぞれを薄葉紙で包み、緩衝材をあて白い布でくるんだ。さていざ下山という段になって、例の担架に像を載せようとしたところ、スペースの都合上どうやっても一度に運ぶことができない。結局二回に分けて運ぼうということになり、一度麓の運搬車まで光背及び本体を運んだあと、さらにもう一度一〇一五段におよぶ石段を登り降りする羽目になった。

こうした苦勞の末、工房に運び込んだ観音像の修理作業は、まず表面を厚く覆った彩色層の除去作業から始めることにした。これには二つの理由があって、ひとつは像全体を蝕む虫

喰に対する処置を行うために素地を露出させる必要があったこと、もうひとつはこの彩色層が制作当初ではなく江戸時代の修理時に施されたものと判断されたからである。ところがこの彩色層を取り除いていくうちに、その下から平安後期の特徴を備えた彫刻面が出てきたのには驚いた。そもそも本像はその彩色の印象が強いせいか、それほど古いものではないろうという見解が元々あったからである。幾多の先人たちの目を欺いていたのにはもう一つわけがあって、それはほかならぬ観音様の御尊顔にあった。そのうつむき加減の、どこか寂しげな印象のあった顔面には、平安時代には存在しない玉眼という技法が使用されており、またその彫刻表現も平安時代のものとはかけ離れたもので、これが像全体の制作時期を曖昧にしていたのである。そこで、顔面付近の彩色層を除去したところ、ちょうど両耳の前を通るように部材の合わせ目が確認できた。まるでお面のように付けられた顔面部の木質は、本体に比べて明らかに時代が異なっており、このことから顔面部もまた彩色層同様江戸時代に作られたものと判断できた。像の状態から判断するに、江戸の修理時も像全体が虫

害に蝕まれていたことが想像された。それは彫刻表面を著しく損なうもので、おそらくは顔面も同様であったろう。その時修理にあたった人間は、体幹部に関しては分厚い彩色を施すことでなんとか体裁を整えたものの、顔面に関しては絶望的な状態と判断したのではないか。そこで両耳の前あたりに鋸を入れて顔面を切り取り、新たに御尊顔を制作するという手段に打って出たのであろう。その際、当代において主流となっていた玉眼の技法を用いたのに違いない。とかく江戸時代の修理というのは対象像の歴史的な特徴はあまり考慮されず、当時の技法を如何なく發揮するほうに重点が置かれていくように、あまつさえそれに合わせて像を切断したり、調整したりするケースも多々見られる。本像における一連の処置も、手掛けた彼にとってはごく当たり前のことであっただろう。

一方現代の修理においては、まず第一に修理対象の持つ制作当初の情報が何をおいても尊重され、それを可能な限り保持するべく処置を行う。また、新たに形状を補う場合でも、対象像の制作された時代の造形的特徴に沿って処置を行い、

これとよく似ている状況でかつ異なる地点に終着したのが、別のところのお寺の仁王像を修理した時のことだ。元来仁王像というものは寺の山門に阿形、吽形の一对で安置され、仏敵の侵入を防ぐ役割を持つ仏像だが、山門という外気に触れる環境にあるため損傷をもっとも受けやすい宿命にある。修理対象となった像も長年の風雪によって、像表面に汚れが溜まり、彩色は所々剥がれ落ち、玉眼が割れるなど、見た目にも散々な状態にあった。あるとき寺の護持会の方が、その余りにもひどい汚れを落とそうと軽くハタキを当てたところ、そのままゆつくりと後方の壁に倒れ掛かっていったという。どうやら足元で木材の腐朽が進んでおり、もはや自立さえ不可能な状況にあったようなのである。そこで修理をしようということになって、そのための調査に伺ったのだが、そのときも凄かった。寺に着くと住職が困ったような顔をして「今日はだめだよ、調査は無理だ」と言う。聞けば、どこからか小型のスズメバチが大量にやってきて仁王像を取り囲んでおり、むやみに近づけないとのことだった。実際に見ると、たしかに夥しい数の蜂が、両像の特に頭部に密集している。

像の印象を正しく整えなくてはならない。そこで本像では、この江戸期の顔を一旦取り外し、別材にて平安時代後期の様式に即した顔面を新たに補うこととした。こうして観音像本来の姿に近い形で像容が整えられたわけだが、よもや顔の整形手術を二度に渡って受けることは、当の観音様も思いもよらぬことであつただろう。

いくら学術的におかしいとは言うものの、現在の住職および檀信徒にとつては長年護持してきた大切な観音様のお顔である。それを取り替えるなどというのは、到底受け入れがたいものであつただろう。そこで本修理中は、数回にわたり依頼者と修理者の間で協議の場を持つこととした。修理者側から、像の持つ特徴や修理事業の工程、修理後のイメージについてプレゼンテーションを行い、それを受けた依頼者側の意見も取り入れながら、双方がひとつの目的に向かって本修理事業に関わることを目指したのである。結果、平安時代造像の仏像らしい姿を取り戻した観音像は無事依頼者側に受け入れられ、以前にも増して大切に護持されているようである。

中でも大きく口を開けた阿形像は、その開口部から蜂が忙しく出入り入つたりしており、その光景はまさに圧巻と言うほか無かった。仏敵のみならず風雪や腐朽、さらには蜂に至るまでその身一つで戦わなくてはならない仁王さまの運命を憂うばかりではあつたが、こちらとしてもおめおめと引き下がるわけにはいかない。近くの商店で蚊取り線香を大量に買い込んで点火、それをアルミバケツに入れて、仁王像付近に設置して燻した。辺りに煙が濛々とする中、蜂が退散もしくは気絶して地面に落下するのを見計らって、薬品を滲み込ませて丸めた布を仁王像の開口部に突っ込んで塞いだ。煙がひと段落すると蜂の勢いも無くなっており、一、三匹が辺りを飛び回る程度となつて、ようやく調査を開始したものである。猿轡をかまされた仁王像を調査するのは、後にも先にもこれきりにしたいものだと思つた。凡そ以上の通りの壮絶な状態にあつたため、本修理事業は解体を前提とした根本的なものとなり、まさに「平成の大修理」の様相を呈した。余談だが、阿形像頭部を解体したところその内部にみっちり蜂の巣が営巣されていたのは言うまでも無い。またその周辺には、多

くの蜂の屍が我先にと出口に向かったまま横たわっているのが確認できた。修理作業のなかで、あれほど陰鬱な気分になったこともない。

気を取り直して、ともかくも仁王像の構造的および形状的損傷が丸一年に渡る修理作業で改善し、さて像表面をいかに仕上げるかというところで問題は起きた。前述の通り解体を前提とした修理であつたため、また修理前の彩色は後世の塗り直しであつたため、表面彩色は一部の制作当初部分を残して全て除去していた。損傷処置後、再度組み上げた仁王像は素地状態でありながらも彫刻面が明快にでており、非常に堂々とした体軀に見えた。また、仮に初めてこの像を見る者がいたとして、本像の歴史性（江戸時代中期の造像であつた）を容易に感じ取ることができるであろうと思われた。そこで、依頼者側である寺と護持会に素地仕上げとする案を打診したところ、まかりならぬということになった。元々この仁王像は、「赤いおによるさま」として檀信徒および地域住民に長く親しまれてきており、いくら歴史的価値があるからといって素地仕上げで返されるのはたまつたものではないということ

すべきは、今後誰が主体となつて本像を護っていくのかということだつた。たしかに、修理者は対象像の損傷や問題点を改善できる。しかしそれは像の長い歴史を考えればほんの一瞬间の出来事で、修理後の長い期間本像を護っていくのは寺の住職であり、檀信徒であり、地域住民の皆さんに他ならない。仮に文化財という錦の御旗を振りかざして素地仕上げを押し通したとして、こうした人々の関心が本像から離れることも大いに想像できた。人々の関心を失つた仏像が、驚くべき速度で損傷、劣化していく例は枚挙にいとまが無い。「赤いおによるさま」として地域で親しまれてきた歴史、それも含んでの本像の保存体制を考慮すれば、おのずと自分たちの取る選択肢は決まつたのである。

こうしてようやく「彩色する」という方針が決定し、今度はその施工方法について検討を行った結果、以下の処置を施すことにした。まず像表面に薄い和紙を全面に渡つて二層に貼りつけ、その上に杜寺建築で使用される下地剤を塗布、その後伝統的な顔彩による彩色を行ったのである。彩色層と素地面の間に和紙を挟むことによって、彫刻面への影響を最小

とであつた。つまり像を赤く塗つて欲しいというのである。前述の観音像の通り、像の制作当初部分を尊重する修理を標榜していた自分達にとつて、これは予想もしていなかつた事態であつた。たしかに、科学技術の発達した現代において、古い寺院や壁画、仏像などの表面にわずかに残る塗膜片から、在りし日の姿を想像するのは可能ではある。しかしそれさえも今後の研究によつて真偽が前後する可能性もあるし、たとえその通りに塗つた（もしくはコンピュータ上で復元した）としても、その姿に違和感を禁じえないのも確かである。そもそも、外気に当たる場所での安置を考えれば、彩色層を長期にわたつて保持できないのではないかという懸念もあつた。そこでまた、依頼者と修理者、時には地元の郷土史研究者を交えながら、喧々諤々の協議の場を持ったのである。ひと月あまりの長きに渡る交渉がなされたが、予想通り双方の意見は平行線を辿つた。

しかしその中で気づかされたのは、依頼者も修理者も本像が末永く遺つて欲しいという願いを共通に持っているということだつた。極々当たり前のことである。するとここで考慮

限に抑え、かつ下地剤の塗布によつてある程度の堅牢性を持たせることができた。かくて「赤いおによるさま」は蘇り、寺に戻るこゝとなつたのである。

寺への搬入作業は、晩冬のころ雪の降りしきる中行われた。雪囲いで覆われた山門に運搬車をギリギリまで寄せ、檀信徒の皆さんの力を借りながら安置し、住職による魂入れの儀式が執り行われた。工房で見ていたときは鮮烈過ぎる感のあつた赤い仁王像は、赤い山門の薄暗い空間の中で密やかに映えるようだつた。何よりも檀信徒の一人が「いい顔になつた……」と言つてしげしげと仁王像を見るさまが嬉しかった。蛇足だが、後日別件で寺に伺つたところ、搬入日のわずか数日後にハクビシンと思われる小動物が山門内に侵入し、仁王像の足元にあらうことかマーキングを仕掛けていったという。見ると確かにいくつかのシミのようなものが確認できた。久方ぶりの仁王さまのご帰還にハクビシンも感極まるところがあつたのではないか。人、蜂、小動物と、さまざま生き物から愛される「おによるさま」をこれからも大切に見守っていき

たいものである。

追記

本稿の再校段階、東日本大震災が発生した。犠牲となった多くの方々、今もお不自由な生活を強いられている被災地域の皆様には心よりお見舞い申し上げます。

現段階では想像もつかないが、いつの日か当該地域の皆さんが歴史文化、文化財について語り合える日が来ることを願ってやまない。

以上、県内で仏像修理の仕事をしてきた中での体験談をだらだらと書き連ねてみた。この他にも、「像の中から殿様の札」や「ジャズをバックに安座式」など修理にまつわる思い出話は尽きない。これもひとえに、仏像を修理することを通して、その都度様々な人々との関係を結ぶことができたからである。戻った仏に改めて手を合わせ、観音の顔や仁王の色について真剣に議論する、そしてさらに今後どうやってこれらのほとけさまを護っていくのか、ひいては寺、堂、地域をどうやって盛り上げていくのかという議論に繋がっていくと、我々の仕事も少しは社会に貢献しているのではないかと密かに小躍りするところである。仏像修理に従事するようになって僅かに十年ではあるが、今後ともこうした地域の活性化の一助となり、ひいては日本を元気にすることを目指し、日々研鑽を重ねてゆきたい。